

ホーソーンの『ブライズデイル・ロマンス』と歴史

History and Hawthorne's *Blithedale Romance*

松 阪 仁 伺*

Hitoshi MATSUSAKA

ホーソーンの『ブライズデイル・ロマンス』は理想共同体の建設とその挫折を語ったロマンスである。これは作者自身のブルックファームという理想農場への参加を素材として執筆された。しかしこの作品は農場の記録としては失望させられるというのが、出版当時の一般的な評価であった。しかしホーソーンの真意は、失敗の原因を事細かに、報告することではなく、失敗の「本質」を描くことであったのだ。それゆえにこの作品は、ブルックファームを超えて、アメリカのあり方そのものに対する批判ともなっている。ホーソーンは現象の底に本質を、変転きわまりない時の流れに、それを貫く不動のものを求めたのであり、アメリカ人の行動原理と原型を求めたのである。

常に前を観て過去を振り返らないこと、未来は常に過去の改良である、あらねばならぬというのが、アメリカ人の時間感覚である。対してホーソーンの眼は、常に過去を向いている。ホーソーンにとって歴史とは、永遠の繰り返しにほかならなかった。

ホーソーンの基本的スタンスは、社会の主流に対して懐疑の眼を向けること、時には断固として「否」と叫ぶことであった。これは、アメリカにおいて文学者がとりうる最も正当な生き方であった。

キーワード：ホーソーン、歴史、自然、改革

Key words：Hawthorne, history, nature, reformation

若く希望に燃えたホーソーン(Nathaniel Hawthorne)は、ブルックファーム(Brook Farm)というユートピア計画に参加し、結果として幻滅を味わった。参加の動機には、この理想主義農場でならば結婚することも経済的に可能だという判断も混じっていた。それが1841年のことであり、このロマンスはその実体験を素材にして執筆されたが、それは1852年のことであった。ほぼ十年の歳月が流れたことになる。

このロマンスはホーソーンにおいては例外的な「現代物」である。ホーソーンは生きて動く現実を文学作品のテーマとしたのであり、「歴史」などとは無関係なのではないか。本論のタイトルを見て、そういう疑念を抱く読者は決して少なくないはずだ。ホーソーンにとっては、新世界に到着した直後の清教徒社会あるいは独立戦争は歴史であったとしても、自らがその一員となった理想社会建設の試みなどは、絶対に歴史などと呼びうるものではない。

私の感覚では、だいたい半世紀が現代(あるいは現在)と歴史を分かつ境界線である。太平洋戦争が終わって、五十年あまりが過ぎて、われわれの敗戦は歴史の領域に入ろうとしている。というのが正直な感想である。現在の生々しさを消し去るには、その程度の年月を必要とするのではあるまいか。あるいはこれには異論があるかもしれないが、少なくとも十年前の自身の体験は断じて歴史の範疇には分類しえない。これが常識の立場であろう。

しかしホーソーンにおいて歴史の問題を考察する際には、別のアプローチが必要である。歴史はつねに現代とは無関係ではありえない、というのが彼の基本的な立場であった。過去の集積がすなわち現在であり、現在という地表を理解するためには、歴史という深層構造を理解することが不可欠なのである。ホーソーンは理想社会の建設という試みの背後に新世界のほぼ二百年に及ぶ歴史の厚みを感じたのである。彼はアメリカ人のあり方を、過去を視野に入れて語っている。過去への鋭い洞察なしには、現在は理解できないというのが、ホーソーンの信念であった。

管見によれば、『緋文字』(*The Scarlet Letter*)『七破風の家』(*The House of the Seven Gables*)『ブライズデイル・ロマンス』という長編ロマンスは三部作と称せられるべき作品であり、雄大な構想のもとに書き下ろされたという印象を受ける。完結しているという意味での、最後のロマンスである『大理石の牧神』(*The Marble Faun*)の舞台がイタリアであるのに反して、これらはアメリカに限定される。さらにいえば、ニューイングランドのボストン近郊である。それが暗示するように、これらの作品のテーマの根底にあるのは、清教徒の精神である。これらの三部作においてホーソーンは、清教主義の特筆すべき三つの側面を批判したというのが、私の見解なのである。

『緋文字』においては、かれはピューリタニズムにおける「性」という問題に取り組んだ。これは彼にとって

*兵庫教育大学第2部(言語系講座)

は作家としての生涯のテーマであったが、それを、峻厳なる清教徒の宗教倫理を背景にして、美しく悲しい物語を語った。

『七破風の家』においては、かれはピューリタニズムにおける「経済」の問題に取り組んだ。この意味での清教徒の代表的人物は、ベンジャミン・フランクリンにほかならない。かれこそがアメリカ人の、経済的な意味での、行動原理の原型なのである。経済との連関を鋭く指摘したのは、マックス・ヴェーバー(Max Weber)であり、その著書の『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』である。宗教と経済という、およそ水と油の関係にあるとしか考えられない両者の間に本質的な結びつきを洞察したのが、このドイツの高名なる社会学者であった。

そして、『ブライズデイル・ロマンス』においては、ホーソーンはその清教主義批判の矛先を、「改革の精神」に向けた。そして、この三部作によって、ホーソーンは清教主義からの呪縛を逃れて、ある程度の精神の自由を獲得したというのが、私の想像である。

さらに、三部作は、構成の面からいっても、古典的な均整美をもっている。『緋文字』は、物語の舞台を過去に置き、現在から過去を展望する試みであり、『七破風の家』は過去と現在を連結する試みであったし、『ブライズデイル・ロマンス』は物語の時間を現在に限定し、その深層構造たる過去の意義を探る試みであったと言える。

そして三つのロマンスに共通するのは「罪」のテーマである。

『ブライズデイル・ロマンス』はブルックファームの記録としては失望させられるというのが、出版当時の一般的な評価である。ホーソーンの意図は、失敗の原因を事細かに、報告することではなく、失敗の「本質」を描くことであったのだ。それゆえにこの作品は、ブルックファームを超えて、アメリカのあり方そのものに対する批判ともなった。ホーソーンは現象の底に本質を、変転きわまりない時の流れに、それを貫く不動のものを求めた。アメリカ人の行動原理と原型を求めたのである。

常に前を覩て過去を振り返らないこと、未来は常に過去の改良である、あらねばならぬというのが、アメリカ人の時間感覚である。対してホーソーンの眼は、常に過去を向いている。ホーソーンにとって歴史とは、永遠の「繰り返し」にほかならなかった。

ホーソーンの基本的スタンスは、社会の主流に対して懐疑の眼を向けること、時には断固として「否」と叫ぶこと。これが彼の終生変わらない立場であったし、またアメリカにおいて文学者がとりうる最も正当な生き方であった。それは後代の文学者にも受け継がれることになる。

ホーソーンが自らの文学ジャンルとして、「ノヴェル」ではなく「ロマンス」を選択したのは単なる文学上のテクニックではなかった。ノヴェルの原義が「目新しい」というのは意義ふかい。それは産業革命以降に主流になった文芸でありジャンルであり、その背後には近代そのものを支えるイデオロギーが潜んでいる。それは現代こそが、歴史の上で最高の時代であるというものである。これに対して、ロマンスは基本的に過去に関わる文学ジャンルである。

ホーソーン批評における、初期の代表的な研究者ワゴナー(Hyatt H. Waggoner)は、新批評の熱烈な支持者であって、その研究書においてその立場を頑固なまでに貫いている。そのワゴナーはこの作品を論じるにあたっては、気鋭のニュークリティックらしく、作品を一編の詩として読み、その「テクスチャー」に注目することを宣言している。同時にわれわれが注目すべきは、その作品分析の作業が、この作品の歴史性を露わにすること、偉大ではないにしても、『ブライズデイル・ロマンス』は歴史小説であることを、仄めかしていることである。¹

ワゴナーの方法論には、限界があることは今では誰の目にも、明らかではあるが、かれが基本的に優れた研究者であることは、何人も否定できないであろう。この作品の歴史性を見抜いた、かれの慧眼はさすがだと私には思われる。この作品に歴史のテーマを追いかけるのは、筆者の妄断ではないことの、一つの証左となろう。

ホーソーンの炯眼がユートピア計画の背後に洞察したのは、一つは先述のように清教徒に由来する改革の精神であり、メイフラワー号で新世界に渡ったピルグリムファーザーズ以来の伝統である。今ひとつは、これはレオ・マークス(Leo Marx)の用語によればアメリカにおける「田園主義」(pastoralism)の伝統である。彼は、ブルックファームの理想農場を支えているのが、これらの理念であることを理解していた。以下の議論はこれら二つの理念をめぐって展開する。田園主義の伝統の濫觴は、初期の植民時代に既に存在したのである。²

『ブライズデイル・ロマンス』を理解する要諦は、それが「メリイマウントの五月柱」("The May-Pole of Merry Mount")の続編であり後日譚であることをしっかりと認識することである。これはすでにダニエル・ホフマン(Daniel Hoffman)が指摘している。³がその意義は、さらに大きな広がりを持っていて、ホフマンによって全てが尽くされたわけでは決してない。

先行する短編で描かれる物語は、歴史的事実に基づいているが、ホーソーンはかなり自由に想像力を働かせたようである。ストーリーは異教の祝祭を信奉する人々と、清教徒の争いを軸に展開する。ホーソーンは、新世界の片田舎での小競り合いとでも称すべき争いに、大げさなといえば、アメリカの運命の予兆を見たのである。メリイ

マウントの美しい夢は、鉄の男エンディコット(Endicott)によって踏みつぶされてしまった。この悲しむべき結末に、ホーソーンはアメリカという国家の運命の岐路を見たのである。結果として、清教徒の価値観がアメリカ文化の主流となり、歴史の表舞台を占拠することとなった。メリイマウントは潰え去ったが、その美しい夢までが絶滅したわけではない。

十九世紀においても、既存の社会の価値観に反旗をひるがえして、自然の桃源郷を夢見る人々が出現した。ホーソーン自身が参加したブルックファームもそういう計画の一例であった。ホーソーンはその理想郷建設計画が、メリイマウントの夢の継承者であることを見抜いたのである。

メリイマウントと清教徒の争いの根は深く、故国英国にまでさかのぼる。メリイマウントはメリイイングランドの末裔であり、当時の英国はすでにキリスト教化されて数百年を経ていたが、五月祭を初めとする異教的風習は生きながらえていた。そのメリイイングランドに洗面をむけて、とどめを刺したのが、キリスト教の原理主義者ともいべき清教徒たちであった。

メリイマウントの祝祭の世界には、エデン神話あるいはその異教版たる「黄金時代」の神話が焼き重ねられる。メリイマウントがエデンの園の住人であり、黄金時代に生きる人々であれば、清教徒は墮落した世界、鉄の時代のチャンピオンであった。

この短編におけるホーソーンの興味は道徳的なものであり、慎重なわれらのロマンス作家はメリイマウントの生活にも、清教徒の生き方にも軍配を上げていない。メリイマウントが暖かい異教的自然に生きる人々であったとしても、それははかない夢でしかなかったのである。二つの植民地の対立は、人生哲学の衝突にまで昇華する。いずれをも選択できないホーソーンが支持したのは、メリイマウントで結婚した二人の若者の運命であろうか。かれらの運命は楽園喪失の物語をなぞる。

しかし、『ブライズデイル・ロマンス』は先行する短編の単なる同工異曲ではない。自然への回帰という衝動を共有しながらも、二つのユートピアには、見逃せない差異が存在することも事実である。それは、両者を隔てる、ほぼ二百年という歳月によってもたらされた。十七世紀の英国においては、メリイイングランドが社会の主流であり、清教徒は新参者であった。清教徒は、古代より連綿と続いてきた伝統主義的社会における異分子であり、近代の芽生えであり尖兵でもあった。

新世界において清教徒が覇権をにぎることにより、事情は逆転してしまった。十九世紀のアメリカで主流になったのは、蒸気機関車に象徴される機械文明の未曾有の進展であったし、それに伴う金銭万能の価値観であった。それは、すなわちわれわれが『七破風の家』や『ブライ

ズデイル・ロマンス』に窺い見ることのできる資本主義社会である。

ほぼ二百年にわたる歳月により、清教徒が社会の主流になった。それに反発する形で、自然と友愛の理想社会をもとめる衝動が生じた、と説明することができる

ホーソーンが参加したブルックファームの実験、そしてブライズデイルの計画とは、機械文明や資本主義の激烈なる競争を否定して、自然と平等と友愛に満ちあふれた世界を構築することであった。墮落した世界をすてて、理想社会を新たに構築することであったのだ。清教徒たちが、万里の波濤をこえて、アメリカの荒野に移住したのは、墮落したヨーロッパに見切りをつけて、理想的な宗教共同体の完成を夢見たからであった。これがアメリカという国家、アメリカ人の原型的なパターンであり、それは折りに触れて、彼らの理想主義的行動の推進力となった。

理想社会の建設が清教徒の本願であったことは、ホーソーン自身が『緋文字』の劈頭で新しい植民地の建設は、「人間の美德と幸福のユートピア」("whatever Utopia of human virtue and happiness")の夢想の産物であったと記している通りである。⁴ 墓地と監獄が理想郷に不吉な暗い影を落としている。処女地を揺るがしたのは、美貌の人妻の姦通という不名誉な出来事であった。ブライズデイルにおいても、男女関係のもつれが、ユートピアを悲劇の舞台に変えてしまう。人間の本能たるエロスこそが、罪の源泉であることはホーソーンが繰り返し強調するところである。

つまりは、ブライズデイルの計画は清教徒の精神を引き継いだものでもあったのである。

それで、ブライズデイルの計画は、メリイマウントの精神と清教徒の精神の、両方を継承していることになる。それが、ホリングズワース(Hollingsworth)という清教徒の末裔が、異教の楽園にまぎれ込んでいる、理由であろう。

ブライズデイル崩壊の原因は、これらのアーキタイプな行動原理に原因があるのであり、しかもその双方に責任があるのだ。以下、その点について論じる。

作品を実際に分析する前に断っておきたいことがある。それはこの作品の「語り」の構造のことである。これはホーソーン研究者ならば常識であるのだが、この作品ではカバデイル(Coverdale)という登場人物が語り手を兼務している。またこの語り手と物語には、ホーソーン自身と農場での体験が投影されている。

語りの視点は、かなり厳格にまもられていて、当時としては、前衛的な実験小説であった。このロマンスを租上に載せる論文の多くが、この点に焦点を絞っているのも当然であろう。本論のテーマも、この語りの構造とは、無関係ではありえないのだが、紙幅の関係もあり、これ

に触れるのは別の機会にしたい。

「黄金時代」や「アルカディア」といったパストラルの神話に頻繁に言及されることはカバデイルたちの計画の田園主義（パストラリズム）を雄弁に物語っている。さらに注目すべきは、それが五月祭という祝祭に結びついていることである。

黄金時代の神話を祝祭の世界に還元することは、ホーソーンの田園主義へのアプローチの特徴である。カーニバルは日常世界に出現する異界であり、異次元の世界であった。人間はカーニバルの熱狂の中で、ディオニュッソスの陶酔の世界の中で日常性から離脱して無垢なる自然、いまだ文化の扉の開けられていない自然に回帰するのである。

カーニバルは日常的な時間が停止する世界、異質の時間が流れる瞬間でもある。むしろそれは時の存在しない世界である。さらに祝祭においては、現実世界を縛る身分の違い貧富の差などは雲散霧消して、人々は完全なる平等と友愛の夢を生きることとなる。カーニバルは、日常世界では抑圧されるエロスが爆発する瞬間でもあった。それが肉に関係していることは、言葉自体に「肉」(carnal)が入りこんでいることから察せられる。

先述のようにブライズデイルはメリイマウントの精神の復活であり、その継承でもあった。そして正にこの点に、ブライズデイルの崩壊の種子が潜んでいたのである。彼らの試みが墮落した文明社会を捨てて、無垢の自然に回帰すること、人類の歴史の最初にあったとされる自然の理想郷を再現することであれば、その中心人物はゼノビア(Zenobia)である。彼女だけにエデン神話が焼き重ねられ、語り手は彼女をイブに譬える。この作品における彼女の役割はパストラル的自然を体現することにほかならない。

メリイマウントの五月祭で爆発したのは、野生の森の自然、暖かい異教的自然であり、エロスに濃く染められた自然であった。そのシンボルは五月柱であり、さらに焦点を絞れば、柱に架けられた真紅の薔薇であった。常識であるのでホーソーンは言及を避けているが、薔薇は西洋においては、昔より花の女王としてもはやされた。花の中の花、花そのものであった。

薔薇はなによりも愛の女神ヴィーナスの花であった。それゆえに薔薇、特に赤い薔薇はエロスの象徴であった。愛の歓喜が渦まくメリイマウントの中心に位置するのが、薔薇の花なのである。

さらに薔薇は、これは通常白であるが、聖母マリアの象徴でもあった。聖母は「神秘の薔薇」(rosa mystica)という美しい異名をもっている。しかし薔薇といえば普通は赤であるから、赤い薔薇が聖母のシンボルとされることもあったようだ。薔薇は、二人の対照的な女性の花で

あり、その共通のシンボルであった。それは〈性〉と〈聖〉の共通のシンボルであった。

『ブライズデイル・ロマンス』の第8章では、とくに五月祭に言及される。これは無論ブライズデイルが現代版のメリイマウントであることを何よりも雄弁に語っている。自然回帰の衝動の根底にホーソーンは、メリイマウントの世界を、そして祝祭の世界を洞察していたのである。

May-day—I forget whether by Zenobia's sole decree, or by the unanimous vote of our Community—had been declared a moveable festival. It was deferred until the sun should have had a reasonable time to clear away the snowdrifts, along the lee of the stone-walls, and bring out a few of the readiest wild-flowers. On the forenoon of the substituted day, after admitting some of the balmy air into my chamber, I decided that it was nonsense and effeminacy to keep myself a prisoner any longer. So I descended to the sitting-room, and finding nobody there, proceeded to the barn, whence I had already heard Zenobia's voice, and along with it a girlish laugh, which was not so certainly recognizable. Arriving at the spot, it a little surprised me to discover that these merry outbreaks came from Priscilla. (58)

「現代のアルカディア」(A Modern Arcadia)と命名された第8章の冒頭の引用である。特にゼノビアに言及されるのは、彼女がこの祝祭のそしてブライズデイルの中心人物たることを意識しているためであろう。前テキストたる短編と同様に、ホーソーンはパストラルの神話と祝祭を合体させる。メリイマウントにおいては、浮き浮きとしたお祭り気分が一年を支配していた。現実の時間の進行は無視されて、擬似的なエデンの園が砂上に構築されたのであった。カバデイルたちの計画の祝祭性は、この作品においては、そこまでは徹底はされていない。しかし二つのユートピアの時間意識には一脈通じるものがあつたようだ。ともに現実原理たる時間を無視するという態度は共有している。

引用にあるように、五月祭は「移動祝日」と宣言される。それは、年によって日付が変わるイースター(Easter)などの祝祭のことである。五月一日に祝われるのが、五月祭であるが、それはあまりに冷たかったので、しかるべき時期まで延期されたのである。決してメリイマウントのように、一年中にお祭り気分が支配していたと明言されている訳ではない。しかし、ここブライズデイルにおいても祝祭の気分が絶え間なく、漂っていて、それをホーソーンは「移動祝日」という言葉によって、暗示しているのではないか、と思われる。第24章で語り

手は森の中で、奇妙なマスカレードを覗き見る。それは彼が、ブライズデイルの正体を透視する瞬間であるが、場面は一種の祝祭に仕立て上げられている。

確かなことは、ブライズデイルにおいては現実世界とは異なった時間が流れていること、人々は実社会とは違った時間意識をもっていたことである。それは、吹雪について進むカバデイルの行為が、「町の時計の音を遙かに越えて」("travelling far beyond the strike of city-clocks")(11)という語句などにも、さり気なく仄めかされている。この時間とは、社会を効率的に運営するための時間、あのフランクリンが「時は金なり」と言った意味での時間であり、現実そのものと言っても過言ではない。

ブライズデイルはそういう現実の枠組が破壊された世界である。それは、エデンの園や黄金時代のごとき、時が存在する以前の世界である。

祝祭の場面では、ゼノビアとプリシラ (Priscilla) の行動を中心に描かれるのは、作者が薔薇に象徴される祝祭の自然の女性性、を強く意識しているためである。

先にメリイマウントの薔薇と、その二面性に触れておいたが、それはゼノビアとプリシラという姉妹に継承されている。豊かな黒髪を蓄えたゼノビアは、ヘスター (Hester) や『大理石の牧神』のミリアム (Miriam) と同タイプの豊かな性的魅力を備えた女性である。その彼女はカバデイルの性的夢想の中で赤い薔薇として出現する。

Pertinaciously the thought—'Zenobia is a wife! Zenobia has lived, and loved! There is no folded petal, no latent dew-drop, in this perfectly developed rose!'—irresistibly that thought drove out all other conclusions, as often as my mind reverted to the subject.(47)

「満開の薔薇」("this perfectly developed rose")。これこそが彼女の本質であり、ゼノビアという人物造形の根底にあるものである。

しかし彼女が薔薇になぞらえられるのは上記の一カ所のみであり、一貫して薔薇のイメージの下にあるヘスターとは対照をなしている。これはゼノビアが複雑で多面的なキャラクターであり、薔薇だけが彼女を支配しているわけではないからである。

プリシラは作品中で常に虐げられる立場にあり、愛に動機づけられた愛に生きる唯一の登場人物である。その彼女が薔薇に、しかも幼いがゆえに「薔薇の蕾」(rose-bud)に、しかも頻繁に譬えられていることは刮目しておく必要がある。彼女は『七破風の家』で白い薔薇として登場するフィービー (Phoebe) と同型の女性であり、ホーソーンは薔薇が聖母の花であることをしっかりと意

識しているはずだ。

ゼノビアとプリシラという美しい姉妹は祝祭を楽しんでいて、プリシラは五月祭にふさわしく花で華麗に飾り立てられているのだが、そこに「異臭のする醜い雑草」("a weed of evil odor and ugly aspect")(59)がさり気なく加えられていて、全体の効果を見事に損なっている。この悪意の張本人は、ゼノビアであって、恋のライバルを蹴落とすことが眼目である。そしてこの点にこそ、ブライズデイル崩壊の萌芽が潜んでいたのである。

ゼノビアには繰り返し、雑草のイメージが焼き付けられ、それが彼女の著しい欠点であることが強調される。雑草は、彼女の奔放なる自然、過ちを犯しやすい異教的自然の、シンボリックな表現であろう。

通常の世界とは異質であることを強調した後に、語り手はブライズデイルを黄金時代に譬えて、因習的な共同体でなら生じない恋愛事件が多発したことを報告している。

While inclining us to the soft affections of the Golden Age, it seemed to authorize any individual, of either sex, to fall in love with any other, regardless of what would elsewhere be suitable and prudent. Accordingly, the tender passion was very rife among us, in various degrees of mildness or virulence, but mostly passing away with the state of things that had given it origin. This was all well enough; but, for a girl like Priscilla, and a woman like Zenobia, to jostle one another in their love of a man like Hollingsworth, was likely to be no child'd play.(72)

この恋愛沙汰、愛の糸のもつれが、理想郷計画の崩壊の唯一ではないにしても、主要な原因であることは否めない。それはメリイマウントの楽園に既に、胚胎していたものである。カーニヴァルのエロスとは、野生の森の自然に象徴される、あらゆる束縛を解かれた自由奔放な愛である。なんらの規制、なんらの法を知らぬ愛欲が、ゼノビアの悲劇を引き起こしユートピア計画の転覆に到ったのである。ゼノビアが血をわけた妹のプリシラを悪魔 (ウェスターベルト) (Westervelt) に売り渡してでも、掴み取りたいと願ったのはホリングワースへの愛染のころであった。プリシラにしても姉のために恋慕の気持ちを捨て去る気持ちはない。理想共同体が恋愛事件をきっかけにして、破綻していくのは決して偶然ではなく、ブライズデイルという共同体の論理に従った結果であり、その理念そのものに根ざしているのだ。ホーソーン自身が参加したブルックファームにおいても、やはり恋愛事件が多発したと伝えられている。

ブライズデイルの理想共同体が、メリイマウントの精神の継承者であり、カーニバルの世界そのものであるこ

とを如実に示す場面がある。第24章で、町から帰ったカバデイルが出くわす、奇妙な mascarade がそれである。それは、メリイマウントと同様に、「森は、この辺りでは、コーマスと仲間たちが空き地で、いつものようにお祭り騒ぎをしているように、陽気そうであった」("The wood, in this portion of it, seemed as full of jollity as if Comus and his crew were holding their revles, in one of its usually lonesome glades.") (209) と、ミルトンの仮面劇の悪党たちに瞥えられる。

コーマスという名前自体は、「飲み浮かれる」(revel) を意味するギリシア語に由来する。酒神バックスと魔女キルケーの野合のはてに生まれたこの神は、お祭りの喜びの神格化であった。

町から帰還するカバデイルが野生の葡萄を眼にした時に、かれの夢想の中で、葡萄は芳醇なワインに醸造されて、「バックス神の法悦」("bacchanalian ecstasies") (208) をもたらす。このエピソードはミルトンへの言及を先取りし、意識したものである。

mascarade は現実を超越したエクスタシーの瞬間、祝祭の喜びそのものである。その仮装はまさに目くるめく世界、カオスそのものである。

Among them was an Indian chief, with blanket, feathers and war-paint, and uplifted tomahawk; and near him, looking fit to be his woodland-bride, the goddess Diana, with the crescent on her head, and attended by our big, lazy dog, in lack of any fleet hound. Drawing an arrow from her quiver, she let it fly, at a venture, and hit the very tree behind which I happened to be lurking. (209)

やがて仮装者たちが輪になって踊り始めるのは、五月柱の周りに集ったメリイマウントの祝祭を彷彿させる。

A little further off, some old-fashioned skinkers and drawers, all with portentously red noses, were spreading a banquet on the leaf-strewn earth; while a horned and long-tailed gentleman (in whom I recognized the fiendish musician, erst seen by Tam O'Shanter) turned his fiddle, and summoned the whole motley rout to a dance, before partaking of the festal cheer. So they joined hands in a circle, whirling round so swiftly, so madly, and so merrily, in time and tune with the Satanic music, that their separate incongruities were blended all together; and they became a kind of entanglement that went nigh to turn one's brain, with merely looking at it. (210)

実はこれは、ホーソーンのブルックファームでの実際の体験に基づいている。奇想天外な仮装パーティーは、

ロマンス作家に強烈な印象を残して、作品に取り入れられることとなった。注目すべきは、かれがその印象を「あたかも日常の自然の法則が停止したようであった」("as if the every day law of Nature were suspended for this particular occasion") と書き残していることだ。⁵ それは超自然の、異次元の世界であった。あるいは異界が現実を冒した瞬間であったのだ。

ゆえにホーソーンがそれを、祝祭に仕立てることは、自然の筋道であったともいえる。ミルトンへの言及、引用文中の「祝祭の喜び」("the festal cheer") という表現は作者の意図を的確に伝えている。さらには、インディアンの酋長と女神ダイアナが、新婚夫婦になぞらえられているのは、五月祭などの根源にある豊穡への祈りを、作者が意識していたためであろうか。

この仮装パーティーは、語り手カバデイルの啓示の瞬間、つまりはユートピア計画の真実真相が暴露される瞬間なのである。その最も大切な肝要な点は、たびたび繰り返しているように、ブライズデイルの根底には祝祭の世界があること、ブライズデイルの営みはカーニバルに収斂してしまうことである。しかし、この場面は、それ以上のメッセージを含んでいる。

この作品はしばしば指摘されるように、ベールあるいはマスクがふんだんに多用されて、マスターシンボルとも称すべき重要性を帯びている。プリシラは、霊媒として「ベールの婦人」(the Veiled Lady) であるし、ゼノビアの場合はその名前自体が世間に向けた仮面である。ホリングズワースがユートピア計画に賛同しているのは、単なる見せかけであり、本心は別のところにあり、その目的のためにはブライズデイルを裏切ること何の躊躇も感じないようだ。これは他の参加者にも当てはまることであって、かれらが理想共同体の建設に向けた顔は仮面であって、本心は異なっている。

その意味では、実務の指導にあたっていて、共同体の中で唯一の素面の人物であるサイラス・フォスター (Silas Foster) がこの場面においても、仮面を着けていないのは注目に値するし当然でもある。結局、カバデイルに開示されたのは、ブライズデイルの実相であり、それはつまるところ、仮面のパーティーのごとくに現実から遊離した見聞に等しい幼稚な試みだということである。

この mascarade の場面の直後に、ホリングズワースをめぐるゼノビアとプリシラの三角関係の破局の場面が置かれていることについては、作者の周到な計算を感じとらねばならない。

ホーソーンの念頭にあったのは、二つの場面の対照であろう。祝祭の軽やかなベールから、あらわれてくるのは、深刻な人間関係、愛と嫉妬と憎しみである。あるいは喜劇と悲劇のコントラストといっても良いかも知れない。この仮装の場面は物語のプロットが、悲劇に転換す

る境界線、分節点ともいえる。

さらには、カーニバルのエロスの世界と、恋愛の悲劇がしっかりと内的に結びついていることも確かなのである。

カバデイルたちの計画を支えたアメリカの伝統は先述のように、楽園回帰の願望であり田園主義的素朴を求める衝動である。しかし同時に、われわれはやはり強力な今ひとつの伝統にも、目をとめ注意をはらう必要がある。それはこの実験が、清教徒の精神を受け継いでいることである。そのことを語り手は何度か繰り返しているが、代表的な部分を引用してみる。

Our sundays, at Blithedale, were not ordinarily kept with such rigid observance as might have befitted the descendants of the Pilgrims, whose high enterprise, as we sometimes flattered ourselves, we had taken up, and were carrying it onward and aloft, to a point which they never dreamed of attaining. (117)

万里の波濤をこえて新世界に移民した人々の動機は、ほとんどが経済的なものであった、ことは疑いえない。故国で安楽に暮らせる人々が、多大な危険をおかして、未開の荒野を目指すはずがないのである。歴史上アイルランド移民が急激に増加した時期があるが、その背景には貧困と飢餓があった。

しかし清教徒たちの移民をうながしたのは、断じて経済的な動機ではなかった。ホーソーンが『緋文字』の劈頭で述べるように、そして既に紹介したようにかれらは「人間の美德と幸福のユートピア」を夢想したのであった。清教徒たちは自らの試みを「丘の上の町」に譬えることをこのんだ。全世界の人々が見上げて賞賛する理想郷を目指したのである。

ブライズデイルの基本は、メリイマウントの後継者ということであるが、そこには清教徒の精神も忍び込んでいたのである。ブライズデイルの目的は、清教徒のアメリカ植民の目的と重なる。「墮落した世界を捨てて、理想社会を建設する」。これが清教徒がのこした遺産であり、アメリカ人あるいはアメリカという国家の原型的なパターンとなった。そういう安易な理想主義を批判するのが、この作品の目的であったはずである。

ブライズデイルの清教徒的側面は、ホリングズワースという改革家が代表しているといえる。

ブライズデイル共同体は社会改革運動であり、参加した人々も社会改革を目指していることは事実である。が、全員がその趣旨と目的に賛同したわけではない。むしろ、ただ現在の社会体制に不満であるという、ただそれだけの理由で参集したのである。

We were of all creeds and opinions, and generally tolerant of all, on every imaginable subject. Our bond, it seems to me, was not affirmative, but negative. We had individually found one thing or another to quarrel with, in our past life, and were pretty well agreed as to the inexpediency of lumbering along with the old system any farther. (63)

かれらをまとめ上げる絆が「肯定的ではなく否定的であった」というのはいい得て妙である。なにやら不逞の輩の集まり、不満分子の巣窟という観念にしもあらずである。彼らはただ改革という観念、つまり現状に不満という一点において、かろうじて集団の体を成している。ゼノビアはフェミニズムの先駆者であり、男性中心の社会に異を唱える。そういう意味での改革者である。

ホリングズワースを動かしているのは、「罪人の更正」("the reformation of the criminals") (36) であり、ある意味では究極の慈善行為ともいえる。

その昔十七世紀にジョン・エリオット(John Eliot)なる清教徒がいて、彼は伝導の使命感に燃えて、想像を絶する未開の地で原住民のインディアンにキリスト教を布教し、聖書を彼らの言語に翻訳した。第14章のタイトルが「エリオットの説教壇」となっているのは、ユートピア計画あるいはホリングズワースの計画が、そういう崇高な伝統を引き継いでいることが意識されているのであろう。

究極の改革家たるホリングズワースを描く際に、特定の人物がホーソーンの念頭にあったと主張されている。実在の歴史的モデルが存在するというのである。そういう可能性を否定するわけではないが、同時にこの人物の造形には神話や原型が強力に作用していることも事実である。それは彼の職業が「鍛冶屋」であることに立脚している。その職業が彼の清教徒性というか、彼が清教徒の末裔であることを雄弁に語る。

つまり、ホーソーンの清教徒は常に鉄のイメージで描かれ、鉄こそが清教徒を形容するのに最もふさわしいイメージだという連想がホーソーンにはあったようだ。その典型であり代表は「メリイマウントの五月柱」に登場するジョン・エンディコットである。彼こそが「清教徒の中の清教徒」であり、体全体が鉄でできているかのようであったと形容される。

So stern was the energy of his aspect, that the whole man, visage, frame, and soul, seemed wrought of iron, gifted with life and thought, yet all of one substance with his head-piece and breast-plate. It was the Puritan of Puritans; it was Endicott himself! ⁶

しかし歴史をひも解いてみると、幾多の文献において清教徒には鉄のイメージが焼き付けられていて、決してホーソーンの独創でも専売特許でもないことが判明する。イギリスにおける歴史上のピューリタンのチャンピオンとも称すべきクロムウェル(Oliver Cromwell)の通称は「剛勇者」(Ironside)であった。それはまた彼が率いた鉄騎兵のことであり、さらには一般的に清教徒の戦士のことを意味した。

鉄はいくつかに解釈しうる可能性を潜ませている。まずは、それは清教徒の宗教的・道徳的峻厳さを表現するのにまことに適切なイメージである。ホーソーンは「税関」の中で、彼の先祖は「聖書と剣」を携えて新世界へ渡ってきたと語っているが、鉄は清教徒の尚武の気質でもあるのだ。

それと関連してであるが、ホーソーンが黄金時代という神話の枠組の鉄を強く意識していることも見逃せない。鉄の時代とは、貪欲と争いが渦巻く世界、つまり現実世界のことであり、ホーソーンはこのイメージに鋭い皮肉を潜ませることができたのである。

メリイマウントの象徴たる五月柱はエンディコットの鋭い剣によって切り倒される。対してブライズデイルにはその仇敵が忍び込んでいるのであり、侵略によって打倒されるのではなく、内部崩壊してしまうのだ。五月祭の緑の世界に、鉄の男が存在すること自体が矛盾なのである。物語の最後で、ホリングズワースはゼノビアの死体の心臓を刺してしまう。この行為は、五月柱を切り倒すエンディコットの行為と、パラレルの関係にあると考えられる。その昔の黄金時代においては、森に青々と茂っていた樹木は、鉄の時代には切り倒されてしまった。同じ事が「メリイマウントの五月柱」でもこのロマンスでも繰り返される。

鉄のイメージはこの作品の神話的次元の深層構造を明らかにする。そういう脈絡に従ってもうすこし話を続けよう。

ホーソーンがホリングズワースを鍛冶屋に仕立て上げた時に念頭にあったのは、黄金時代の神話であったが、今ひとつ別の神話的連想もあった。それは聖書の伝統に根ざしていて、つまり彼はカインの末裔なのである。彼の非人間的な強引さが、カパデイルとの諍いを惹起し、結果としてユートピア計画にひび割れを生じさせ、ブライズデイル崩壊の一因となった。彼の行為は、ブライズデイルが標榜した兄弟愛と友愛の精神に反するものであったことは言うまでもない。

カインは最初の殺人者、最初の兄弟殺しであり、ホーソーンもその伝説とその神話的な意義に深い興味をもっていたようだ。カインとアベルの物語の背後にあったのは、定着農耕民と放浪遊牧民という、時には戦争にまで発展した、二つの生存形態の敵対関係であるという解釈

が存在していて、成る程と思わせる。

われわれが注目すべきは、カインという名前の語源が「金属職人」「鍛冶屋」であったことだ。⁷ホーソーンがこの知識を何処で得たのかは分明ではない。聖書の注釈書を見たのか、説教などで聞いたのか、あるいは何らかのカイン伝承でその知識を得たのかは、定かではない。しかしカイン伝説と鍛冶屋の結びつきを知っていたことは間違いない。この伝承は、鉄の発明と普及とともに、血なまぐさい殺人と戦争が起こったとする黄金時代の神話と深層でつながっているのであろう。こういうカインが、ホリングズワースのプロトタイプとしてふさわしいことは当然である。

さらにホリングズワースは炎の男でもある。鍛冶屋で連想されるのは鉄と炎である。この鍛冶屋は、古来人類の想像力を刺激してきた火という原型的・神話的なイメージに支配されている。火のイメージといえば、先述のワゴナーがこの作品の詳細な分析を行っている。残念ながら、それは作品内部の分析に限定されていて、やはり新批評の文学観の限界を感じさせる。その意義は神話の世界に広げてみる必要があるはずだ。元来ホーソーンには「火の詩人」とでも呼ぶべき芸術家としての一面があり、その神話的イメージの喚起力を熟知していたことはあまり知られていないようだ。

ホーソーンには「炎の崇拜」("Fire-Worship")と題された短いエッセイがあり、そこで彼は火に対する感慨を深い洞察力をもって語っている。そこで話題にされるのは火の二面性でありアンビヴァレンスである。暖かに暖炉に燃える炎は命の源であろう。同時にそれは地獄の劫火でもあるのだ。ホーソーンが取り上げるのは昔ながらの暖炉であり、新式の密封式のストーブであるが、それに仮託して語るのは火の二面性である。そこには「命をあたえる炎」と「サタン的な火」の二分法がはっきりと読みとれる。

The domestic fire was a type of all these attributes, and seemed to bring might and majesty, and wild Nature, and a spiritual essence, into our inmost home, and yet to dwell with us in such friendliness, that its mysteries and marvels excited no dismay. The same mild companion, that smiled so placidly in our faces, was he that comes roaring out of Aetna, and ruses madly up the sky, like a fiend breaking loose from torment, and fighting for a place among the upper angels.⁸

これは炎の両極性がくっきりとあらわれた箇所である。暖かな暖炉の笑顔に隠されていたのは悪魔の形相であった。特に下線の部分は神の高みに上る野望ゆえに、地獄に落とされたサタンを彷彿させる。あるいはホーソーン

は『楽園喪失』のエトナ山に言及した一節を念頭においていたのであろうか。神話の言語で語れば、炎を代表するいまひとつの顔はサタンである。

ホリングズワースの優しさを語り手のカバデイルが実感するのは、ブライズデイルに到着して、重症の風邪を患い、病の床についた時である。その慈悲の心に感激するとともに「神の愛」("the reflection of God's own love") (43) そのものを感じるほどであった。

鍛冶屋は病室に火をおこし、女性もおよばぬ心遣いで看病する。その炎は気弱になったカバデイルを励ます精神的な炎に昇華してしまう。

There never was any blaze of a fireside that warmed and cheered me, in the down-sinkings and shiverings of my spirit, so effectually as did the light out of those eyes, which lay so deep and dark under his shaggy brows. (42)

その愛そのものに悪意はなく、本人の善意から出たものであるかもしれない。少なくとも自身はそう信じているはずだ。しかし実際にその根底にあるのは真実の愛ではなく、「利己心」("the terrible egotism") (55) なのである。その点を自己洞察することのない彼は、濁った眼で、神の愛と利己心を見誤ってしまう。その意味では自己欺瞞こそが彼の宿痾である。この慈善家の心は、光と影が、神と悪魔が争う舞台なのであり、カバデイルは悪魔が勝利していく事実を目覚めていく。以下の引用においては、それが炎の二極性を通して語られていることに注目しておく。

On meeting him again, I was often filled with remorse, when his deep eyes beamed kindly upon me, as with the glow of a household fire that was burning in a cave.—"He is a man, after all!" thought I—"his Maker's own truest image, a philanthropic man!—not that steel engine of the Devil's contrivance, a philanthropist!"—But, in my wood-walks, and in my silent chamber, the dark face frowned at me again." (71)

この鍛冶屋職人に注がれるホーソーンの眼差しは極めてきびしく、彼は最もアイロニックに描かれる人物である。彼の運命はアイロニーによって彩られる。それは清教徒に向けられるホーソーンの一貫した視線である。

清教徒たちが新世界に渡ってきたのは宗教的迫害を避けて、理想的な宗教共同体を建設すること、宗教改革を完遂することであった。ユートピアを地上に出現させるという点ではブライズデイルと目的を同じくしている。その彼らが新世界で行ったことは、旧世界の悪夢の再現であった。彼らが自らの信条に合わぬ人々を厳しく弾圧

したことは、ホーソーンが繰り返し語るところである。クエーカー教徒を厳しく迫害したのは彼らであった。異端者のアン・ハッチンソン(Ann Hutchinson)を放逐した清教徒は、彼女がインディアンに襲われ八つ裂きにされて死んだという知らせに、神の介入を見てとり、歓喜したと伝えられている。被害者が新世界では加害者に変貌してしまったのである。これが運命の皮肉でなくて何であろうか。

余談ではあるが、ユートピアを地上に出現させる試みは必ず悪夢に終わる。これが二十世紀の共産主義の実験が出した結論であろう。ソビエト連邦はすでに崩壊し、原始的農本主義を標榜したカンボジアは大虐殺に終わってしまい、北朝鮮は国の元首が世襲で引き継がれるという独裁国家になり果ててしまった。天国を求める手は必ず地獄を掴む。ホーソーンはそれを小さなユートピア計画の破綻を通して語っている。

清教徒の精神を受け継いだ人間、無論ホリングズワースがその典型であるが、を鋭く分析した一節がある。

They have an idol, to which they consecrate themselves high-priest, and deem it holy work to offer sacrifices of whatever is most precious, and never once seem to suspect—so cunning has the Devil been with them—that this false deity, in whose iron features, immitigable to all the rest of mankind, they see only benignity and love, is but a spectrum of the very priest himself, projected upon the surrounding darkness. And the higher and purer the original object, and the more unselfishly it may have been taken up, the slighter is the probability that they can be led to recognize the process, by which godlike benevolence has been debased into all-devouring egotism. (70-71)

ここには改革あるいは改革家に潜む危険がもの見事に心理分析されている。彼らの掲げる目標は気高く美しいので、誰もそれに正面切って異をとねえることはできない。本人は偶像崇拝者であり、その使徒を自認しているために、偶像を他人に強制することをためらうことはない。自らが正義を信じ、無私の心で取り組んでいると信じているがゆえに、偶像の為にあらゆる物を犠牲にして恥じることがないのである。

ホリングズワースは、罪人の更正という崇高なる目的のために、他人を踏みつけにして平気なのである。カバデイルとの喧嘩はその結果生じたものである。彼は施設を建設する資金を得るためにゼノビアと恋愛関係になり、彼女が遺産を受け継がないと知るや、平然と彼女を棄ててプリシラに乗り換えてしまう。

究極の慈善行為が、悪魔の所行に化けてしまう。この

アイロニーをホリングズワースほどに、その人生において、立証する例はすくない。

注

『ブライズデイル・ロマンス』からの引用は、Centenary Edition IIIにより、以下引用の後にページ数のみを記す。
Nathaniel Hawthorne, *The Blithedale Romance and Fanshawe* (Columbus: Ohio State University Press, 1964).

1. Hyatt H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study*, rev.ed. (Cambridge: The Belknap Press, 1971), p.188.
2. Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (Oxford: Oxford University Press, 1964).
3. Daniel Hoffman, *Form and Fable in American Fiction* (New York: Norton, 1973), pp.202-218.
4. Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter* (Centenary Edition I; Columbus: Ohio State University Press, 1962), p.49.
5. Nathaniel Hawthorne, *The American Notebooks* (Centenary Edition VIII; Columbus: Ohio State University Press, 1972), p.202.
6. Nathaniel Hawthorne, "The May-Pole of Merry Mount" in *Twice-Told Tales* (Centenary Edition IX; Columbus: Ohio State University Press, 1974), p.63.
7. George Arthur Buttrick, ed., *General and Old Testament Articles · Genesis · Exodus*, *The Interpreter's Bible*, vol.1 (Nashville: Abingdon Press, 1987), p.517.
8. Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, (Centenary Edition X ; Columbus: Ohio State University Press, 1974), p.139.